



中村俊定文庫
文庫 18
54
3



了庵集

崑山集卷四

四

馬鹿集卷之四



崑山集秋部之四

柴のちまきとてあ風風やあみつかり
 世話よあみつかりとてあみつかり
 くまきとてあみつかりとてあみつかり
 風風もあみつかりとてあみつかり
 あみつかりとてあみつかり
 秋つとてあみつかりとてあみつかり
 まま集せつとてあみつかりとてあみつかり
 ひとりのあみつかりとてあみつかり
 あみつかりとてあみつかりとてあみつかり
 とてあみつかりとてあみつかりとてあみつかり
 かりとてあみつかりとてあみつかりとてあみつかり
 よおかりとてあみつかりとてあみつかり

月の句

ふゆも月をみればさびしき

とくも入侍り

なまじりくもやと海に月夜

をみればよ

み月にあつてはさつとつと海に

輪まいて海をさる月夜

とくもさつとつと

あまをひてのちる堂や上燈籠

月影をさつとつと堂をひてさつと

け堂ややれとさつと上燈籠

みまなれ堂なるさつと上燈籠

秋の物さるれさつとさつとハ友

堂の句よ

風よりさつと堂に流る花火は

とくも花火は秋の物さるれとい

くえ安のさつとつとさつと月影よ

まられさつと月を秋さつとてさ

事れさつとさつと堂の句よ

堂火を月をさつとつとつとつと

月をさつとつとつとつとつとつと

月入るのちる堂のひ影は

月うやいとさつとつとつと堂火

とくもさつとつと秋の部へつと

さつとつとつとつとつとつと

小車とさつとつとつとつとつと

とくもさつとつとつとつと

小車は花を月をさつとつとつと

とらふの秋堂れりよ入作
 もろろりたりを教埒るえ
 らひれ但花よ堂の句を
 波よゆれは之飛くさひ
 秋きそふ扇のつまも
 能よりしと上友子集よ

秋風のたして扇のこもれ
 とらふもたり

長者うやわらわお母さや
 ゆやとらやらる視よを
 池田の宿れ長きの日よ
 云女ありしとらり
 きとらる事ある又
 火の
 あり

長者うやわらわく
 とらふもたり

秋のらる花
 源氏物語に
 きとらる事
 ある

秋のきや秋
 毛吹きよ

秋風のき
 とらふもたり

秋風のき
 長以丸
 とらふもたり

秋風のき
 とらふもたり

秋原れ
 角

鹿の袋角の友の物とて新の
時分はあつても四月始はより生玉
不物とされし新は今うぬの
すよ

友のゆくも麻の角はつらぬま
とすれをそをわりのうらむを
とあり又礼記、月令に
仲夏之月麻解解とあり
陳氏注は解は脱也といふ
よゆへにや毛吹草あも四月
の季に入より六月末より堅
実となりうらむとときま
して袋角といふ之青物よ
志もあつて織りあつらる

撰者ふしえ

たまあくとみまへ一おの野合
雄名老奇よ

るやあまたおとあしあをを
みるへ一ほろる秋の夕風
とよありとられみまへ一お
あ

風よふりも南菊は流つてま
有るはよ

風ふくまふ春葉を流つれば
とらつるゆり色あし一ちん
武蔵野のあつて廣神の尾を
一とらつるあつて廣神の尾を
木のこらつるあつて廣神の尾を

とまりかしく舞踏しのこもるに
花と家路行とるすも枯夜四
有る瓶はまはる。

深行そ花をわらうしを枯夜四
とりかも作り

お草の白ひとあつのお草高
お草はよ。

お草の白ひとあつお草はよ
とそ花の白ひとあつお草はよ
や花の白ひとあつお草はよ
とりかも作り
もあつお草の白ひとあつ
のひとあつお草の白ひとあつ
お草の白ひとあつお草の白ひとあつ

らくゆれ

南の野よまよまよわらうまよ
あつお草の白ひとあつお草の
まよまよまよまよまよまよまよ

引かぬお草の白ひとあつお草の
一句のん引かぬお草の白ひとあつ
くまよまよまよまよまよまよ
尾とりかも作りあつお草の
まよまよまよまよまよまよ

縁のりや将場てお草の白ひとあつ
毛吹草よ

お草の白ひとあつお草の白ひとあつ
とりかも作り

お草の白ひとあつお草の白ひとあつ
お草の白ひとあつお草の白ひとあつ

蜀山後加し去人の句。

めし志きや思ても又都を
とらるもゆり長政も長し

少やいりまうり斗の起はし
作と並之とありは越向都云

の句他のやうにひひゆりし
あんれこく都云の句に日他云

中やいりまうり斗の都云
とありいりまひひゆりし

同句を二可く入他云は都を
あゝあゝ半あゝまゝしき撰

去るや
狗よけのてきひとくつたあか
燕太子丹求扁秦王曰烏頭

白馬生角乃許耳丹乃仰天
歎烏頭即白馬亦生角云

此夏風俗通并王充論衡
よみこらけ故半あゝまゝしき撰

つゝあしむりあゝまゝしき撰
瓢箪とむ入いり海軍か

ひまうもんをその名とする
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

新よ入て山く里くる
友子集よ

柳屋へ山くやうまは
とくもゆり石二句長歌見
竹馬よけや小孫乃響虫
く河に中るく竹馬よけ
まきすらるるやうのくえある
たきまは白いぬく馬よけ
うのかとくやうくよけ
ゆき

壁よまの穴くまや
孝子教とくやうまの
耳の竹馬よけとく
お者有言牆在耳依魁在

側とくりあよ耳のありと
まのひくさくま
や他も吹草を
かみ耳ありとやうめ
とくくくまのくあ
ゆき

林の響く花軍あり響虫
軍よ馬のえん今れ馬よ
響のえん今れ馬よ
くく響虫のゆき
響虫のゆき
響虫のゆき
響虫のゆき
響虫のゆき
響虫のゆき

と虫よのつとまうりさうてい
きこしうら

秋の聲とるにひつくる虫
毛吹草よあめりふ

痛うそよにあさるさ
とらうひきくたひるせぬ
作し

のまよせつまうあうま
を園紀よ

院のゆきも白あめり
是とせりわう用白といふ
とあうあすめりあう

鹿の毛れ筆とる所はまじ
雄長老うる筆と云起よ

麻の毛ら筆りあうてふら
比升のきりしの上へえり
と作れりあう

くわうもきりまう麻の
麻のちうらうまう物
まうとちうらうまう古
あも

れくまお筆あうら麻の
あうく時う秋の
とこれあめ

るげや麻たうすらばと
けりしら梅の或勢ゆて
ひうま秋のつらま宗祇の
とまうれ

田まのり傍於らせとひつる
 長夜を白く是を伴のありと
 今夜の鏡くし田まのりありと
 席のまゝらるる真ありとありと
 ありとありとありとありとありと
 奇の中まゝありとありとありと
 ありとありとありとありとありと
 ありとありとありとありとありと
 ありとありとありとありとありと

小男鹿とありとありとありとありと
 な子集ありとありとありとありと
 ありとありとありとありとありと
 ありとありとありとありとありと

新書ありとありとありとありとありと

長夜丸くむむむむむむむむむむ
 きはははははははははははははははは
 おはははははははははははははははは
 れはははははははははははははははは
 名跡とてはははははははははははは
 のありとありとありとありとありと
 新書ありとありとありとありとありと
 ありとありとありとありとありとありと
 ありとありとありとありとありとありと

月星の天れきひのうまひは
 けろひひ

ありとありとありとありとありとありと
 ありとありとありとありとありとありと
 ありとありとありとありとありとありと
 ありとありとありとありとありとありと

入るも事なくぬらき探者と
あひやりたり

天う下こそ海うりり月の星
夜を流波よ

天う下きすい長柄の月乃星
とらるもたり

白やう月ゆきそふもあつた
けうひよ

おらうと白やうらう月の弓
とらるもたり

らうらう月や入口の扇捕
世うひよ

山の葉やあらあう月乃扇捕補
とらるもたり

よき切きまらん丸らね水月
夜を流波よ

すみ切きまん丸らね水月
とらるもたり但あうもや

書出て夜は月やう海う
夜を流波よ

二日月や書出て夜は月やう
とらるもたり先作をや城小

夜を流波よ二句あうあり作
者もうらうて入たり

越後のそら天あも月れ白亮
毛吹草伴伯言よ

越後海やそあも月の白亮
とらるもたり但あうもや

廣くおのりておのりておのりて
むらさき色に

廣くおのりておのりておのりて

とらふおのり

かき海ふりまらきおのり

とらふおのり

おのりおのりおのりおのり

とらふおのり

奇しくおのりおのりおのり

けりおのりおのり

おのりおのりおのりおのり

とらふおのりおのりおのり

たふおのりおのり

月を思ひおのりおのり

世俗よおのりおのりおのり

とらふおのりおのりおのり

おのりおのりおのりおのり

おのりおのりおのりおのり

おのりおのりおのりおのり

おのりおのりおのりおのり

おのりおのりおのりおのり

おのりおのりおのり

月を思ひおのりおのり

行惠句

右教目とておのりおのり

おのりおのりおのりおのり

集よおのりおのりおのり

おのりおのりおのりおのり

いそそ息づくしうきくまや
こ達のこころをそと息とをけ
るうし集に入らるいひりける
事そや

新月の樂こよむむまは
ひつひは

月今宵白樂入のころめ
とらふゆり

嵐戸しませは残るや秋の月
月を嵐戸めしませんまへ

あきうりよめりくまこる顔面
れ但前月らん京東川あり

酒強山の因とゆりて嵐戸
わらみさくちありしとこと

あひおその事は一巻くく
その月にお携りくく男か

尚所奥都と云を取の句ふ
月うの結角ようくく男か

とらふそは丸息く
ひよんまゆりや折ぬむる家月

古奇よ
伝言れ松のこぬらうさむれ

月ちらう家ありらうまふ
とらあり又ひよんまなうや

目のなるの事んまうくく月
乃たぬ面目なうくくんぬ也

伝さたてあうさや
年小松と結標の角け月終

きりんとつるものありのこゝろ希
 三王の時ハ郊カウ藪クサツありとい
 へり後孔子ゴウシ在世ゼイセ漢武カンブの時
 るとおとらうといひて中しく年
 小まればなるなりといふこゝろあり
 あつと修路物シユロモノ歎ナツふ年小まれば
 人ヒトも終ハシるなりといふこゝろあり
 今イマもや抱朴子ハクシ者モノ者モノ如牛ニウ一毛
 獲者ウケルモノ如麟リン角カクももろり又角
 の月ツキもといふ空カラといひるをシし
 とみミるなりおとらうきりんと人の角カクハ
 物モノをけく物モノといひるを詩シ云麟リン之
 角カク振アツくは麟リン一角カク角カク端ヘ有肉ニク
 振アツく仁厚ニウ貌モウとあり漢書カンシヤウ麟リン角カク
 示シ不用ヒヤクといひるなり

月ツキあり一宿シヤク其カ宿シヤクとあり
 一句イツクのんあり一のありといふ
 よしひるをシし一よや他タもとい
 佛ブツ子シもつてありといふなり
 あつれば修路シユロ物モノといふあり者
 ありありといふなり

富士山フジヤマと母ハハとや水ミヅの田タ子シ浦ウラ
 他タと南ミナミ都ツ伎キ腸チヤウとありは作サシ志シ
 右ミドリよりうきい建タテたり一苗タネ前マエの
 毛モウ糸シ人ヒトへ他タはけりなり一母ハハの
 富士山フジヤマと母ハハとや水の田タ子シ浦ウラ

書
 廿七

とありし是の難れ白うえし
ゆるれ所要れものとはさか
とよまらぬあはれもあはれ
とよまらぬあはれもあはれ
あはれもあはれもあはれ
あはれもあはれもあはれ
あはれもあはれもあはれ
あはれもあはれもあはれ

天れ川魚はうけうき月
けさしひよ

や水の魚はうけうき月
とらむはらう

やと月さるや世果の落れ枝
日集あかのうま

月うけらあはれよこの世果は

とらむはらう

月徳の中さるるる桂の榮
けさしひよ

あはれもあはれもあはれ
とらむはらう

あはれもあはれもあはれ
りこの能得れはら長喃あはれ

えさしひよあはれもあはれ
是もあはれもあはれ

とらむはらう

角がよ黒しはのそは月
黒半深の紀州の名もなり

古の母
とらむはらうの浦とあはれ

玉毛すなけりわたるみえ
とよありけり月をねき物ふ
る母く解ふんそそこれ
いづるもとらめら侍らん他三
ヶ月の事や解るその月
とらるもとら月とくらふ
事れり又又ちねの月乃強
向うや志くくそあきあり
ふんすなけり

月あやむらあはれ山路
よもいけらうのちありけ
下立貴よりあつとそあり
あまれ山路と山路の山路
りらうや月あきくゆふあぶ

るちよんるく月あむり
く他ありのてれまあそ
月あむの娘れきく月あむ
ゆふも月あきくゆふあむ

月あやむらすほれおきと物
らすあむの物さしてあとい
月あきむらひひくあむ
きくあむらひひくあむ
くくあむらひひくあむ

月あき人あむあむ十八
中文史記よあむ者あむ
あむあむあむあむあむ
あむあむあむあむあむ

あまきさく人侍ら又はるくひよ
月くまやう九二九四十六日
とりくも侍り又友子集よ
月くまやう九二九の十八夜
ともとり別山集書も三有
るく入るういりまきん死侍り
きん右八句ハ長丸作也

月の名も四方はくくろと書ぶ
是よりみふ名月の句くはく書
丹くかろと書方よむろくはく
いしく建寄く大経院門をく句
あり

月の名も四方よむろむるまふ
とありさくくも侍り一まの
比市く大父長舞びはく句とく
まうりて

心志ま寺法法乃月親
とよみ一半日記のくくり
小書とくめ侍りしありて
久御門まははのさえいりく
身い水縁の終とくもせなまふ
意徳の風雅めくこえおらせ
一ひ事まきんさく御つとふ
てそくくくせなまくくくすり
と絶

あまの侍まあけく一を月親
友子集よなふふ

月も名母あつておてはまをき
しりかをなすあり

月まふ十文の記のさうり
十文と人のさうりとしん
ある礼記は二十日二十日三十日三十日社
とらうもとらう女女さうのさ
それと決決して十文とさうり
いらういらう

とて月とめらうりとて月
七夜八夜とさうり七夜八夜月の光
さうりさうりい入い入はと身身用
あつあつとめとめさうりさうりい入い入はと身身用
とありとあり

とて月とめらうりとて月

とて月とめらうりとて月

とて月とめらうりとて月

とて月とめらうりとて月

とて月とめらうりとて月
とて月とめらうりとて月
とて月とめらうりとて月
とて月とめらうりとて月

とて月とめらうりとて月
とて月とめらうりとて月
とて月とめらうりとて月
とて月とめらうりとて月

とて月とめらうりとて月
とて月とめらうりとて月
とて月とめらうりとて月
とて月とめらうりとて月

まろきれと二家ひつらうやまふ
やまひつらうを花の雪と見
てねらうさちうをそそねと
らきいふらういふとひら
あまそそねとさうさほくひか
まふおさういふらういふの
そふひつらうとらるん八月十五日
ふみ一月のさるやうらうに
らきいと又九月十三日と
まふ十月と又九月とてわ
くらとさうらうとさうら
とこのまふは十月と十三日
あまそそねやまおさうら
うらうらうらうとねのら
うらうらうらうとねのら

遠くやゆん

おてされよまの名月れやのそ
けうそひよ

まあ名月おちやをれ脚の
とまうらう一句いふすま

王勃十三て名をとるの月
王勃十三て王周の序と
うまうらうとあまうらうと
とこの月とらうらうや抄道新
託十三歳と作まこと 瑞王瑯琊
代醉代廿四歳入とらう他
十二歳と多統も二十歳といふ
託もゆり又方子傳廿八二十九
の時の屋うまうらう

大丘あまぬる月とさるあか
けり十三夜の白くさるあま
つまはる長夜を他し

菊の酒のまゝ人あいのまゝ
有る秋はよ

菊の花のまゝ人あいのまゝ
とらんとまゝしるれ別の他れ
菊の酒のまゝ人あいのまゝ
たよ集よ

花の酒のまゝ人あいのまゝ
とらんとまゝしるれ別の他れ
百五もまゝのせんとい菊の酒
大和田家敬と去人の白舟
一こいもん千五と菊の酒

とらんとまゝしるれ別の他れ

とらんとまゝしるれ別の他れ
有る秋はよ

とらんとまゝしるれ別の他れ
有る秋はよ

とらんとまゝしるれ別の他れ
有る秋はよ

とらんとまゝしるれ別の他れ
有る秋はよ

とらんとまゝしるれ別の他れ
有る秋はよ

とらんとまゝしるれ別の他れ
有る秋はよ

みまを視覚するはくわく
の事もさうさかゝるさかゝる
もこのさうさかゝるさかゝる
さうさ

そが菊もえ服の湯や菊草
一斗のんえ張して後そのま
菊ふたよりとちやうとちやう
我の足すれぬ朝も年より
ーとさうさ

咲きぬれ花壇の早よの林うふ
花壇とまうさうさうさうさ
く紅色梅の匂も
あつさうさ早れ梅や梅の花
とさうさもゆり

むつことを作りさうさうさうさ
一斗れんむつことさうさうさ
そとさうさうさうさうさ
うゆれとさうさうさうさ
匂神まや

さし鉄の身とさうさや判刀磯
長丸の匂とあめと判刀といふ
よや他あふふ西宗徳と云人
本津鉄の匂

さしさうさうさ判刀のらあめ
とりさうさ他さうさあめと判
刀と世宗あふひ徳と私親
と鉄さうさとりさうさ我ハ
して人の匂もさうさうさ

る——又南無文珠四尊の念
利刀とついでにわたりよと
少事して

たらあらもよき判がれらあか
とつとも侍り

大原を達らるる歌子落付ぬ
いろは甲七字の弘法大伴と勤
操との作といふ事といふ勤操
の大伴といふ侍りや侍らるるの
いふも若備の作といふれども
左衛門と大原といふ人といふ
方面眼といふわらわす下巻
女子集よ

方面眼たわらわこわす下巻

といつとも侍り

お家の歌あくや侍の具きりやと兼と兼と兼と
又本をえれりよ

此本抄のまわらわら朱蔭院

といつとも侍り又池田の或分よ

まらつれみらの和に朱蔭院

といつとも侍り又池田の或分

めまらもあめくあう一抄

かまらといつ抄の本れり

とよままそえあめくといふ

といつとも侍り又定家のま

明あらう抄あれりすねの

かまらまらうまの山れ

といつとも侍り又松の巻に

て中より本末をくまらざる所
 けりやのそ也但け標の本
 て中よりあつりたるそや
 業事と申あつりたるそ
 をしむしとらふそ
 あうのまの標のちれんそ
 あり付連りたるそ
 あうとらふそやんそ

為らうそそそそそ
 いろとの定炭屋とある定炭や
 うのそそそ

四位よりや御わうそらる標の
 利思句よ

標めりそ并あそそそそ

とらうそそ長たれ長たれ
 山標もくくわふのりる標
 けりもゆきあも入付連りそ
 不知とありそ是の自福寺寶
 光院法師自範と云僧也
 句なり永壽と無二の知友
 まそ知けりも秋の末は
 たらうそそそ入つそ
 標ひろひるそせきし折ぬ
 一村むれそ方より冠標
 のあよの知連りそそ
 せしそ永壽脇とそ
 つそそ

むらぬのあそそそ標は

旁ららのゆる秋の山猿
とよめるしひもせん
櫛ひろひよりしなを
永壽はま本とひらて

のく秘山のひるまの
ねらひしこのよしら
とよみむれ後との

ゆありし真範真福寺之
三綱二条法眼宣業之継子
當二条法眼宣業之継兄也
先一乘院御門主大往院准
右山同字よんいしやさ
しん

大栗あをよおてるその娘を

まなき胡桃と日蓮とあると
そとあり先年ふねん
大坂より

月ころころ男いあがり外
こしてよせしとせぬせ
川きやうの故事とすん
久一寺のころや先何の
故事とすしつらえ

人ぬみえくおりの物
人ぬの志向やるれつ
ともみ人ぬの越向持
こいぬらもあす

道雲にいつたなられて
南禅寺金地院すのり

ふは東照権現れ以不
様とて本縁とせしむ
續し

以不様は権現さまのこのま
お別は御不れ以不様とて
一ゆ以不様といふ名はあ
とくんとくきうしんこふ
まじりともあつてもや一白
くあかの以不れ以不様と
あうーとくすてくとも
撰集するまじりともあつ
めかかてみるーとくま
とりせりてはむを

以不様は権現様の御
とも今すーとくま
三白と取丸地

とくまやまき秋風の神
女子集まれり

むらむらた秋風のな
とくまもゆり

赤法も定家も八月た
初書も定家もこの年の年
佛誕生速母法有り午
今年又も八月た
家々の山庄いふ念山
以不様も昔のまじり
西よ何果強ひたれは

以再地之しなまこ事と世に
元沙所一侍る名所をいかに
發句よあつり侍るあり
乞ひ日記とくれらるるふ
て何りありらる事の侍る

